HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 「国際・地域・文化」と「まちそだて」：「国際地域文化論」への1アプローチ |
| Author(s) | 筑和, 正格 |
| Citation | 国際広報メディア・観光学ジャーナル, 7, 23-44 |
| Issue Date | 2008-11-28 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/35148 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | p023-044TSUKUWA.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts



# 「国際・地域・文化」と「まちそだて」

## ―「国際地域文化論」への1アプローチ―

筑和正格

## "International; Region; Culture" and new "Community Development"

### -An Approach to "International Regional Culture Studies"-

TSUKUWA Masanori

abstract

The purpose of this paper is to examine the basic concepts of "International Regional Culture Studies", structure them and consider adequate methods of new "Community Development", which contribute to the promotion of tourism at the same time.

It is indispensable first to construct conceptual systems in order to understand what "culture" is because it is "an historically transmitted pattern of meanings embodied in symbols" (Geertz) and therefore can hardly be recognized by external observations alone. The "culture" of a human group reflects the value of its members. Furthermore, we can formulate that the term "international" means the relationship between or among larger regions and can be characterized by the interrelationship of regional cultures and therefore of different values.

The construction of "conceptual systems" is also required as part of activity of new "Community Development" because it means a sustainable revitalization based on the internalized common values of participants, and these values arise from self-recognition based on the conceptualization of their own culture. The further task of new "Community Development" is to somehow transform the concepts of their own "culture" into a tangible reality.

（本稿は、観光創造専攻の授業科目「国際地域文化概論」全8回の講義のうち、著者が担当する第3回の講義内容をまとめたものである。）

# 1 はじめに

「概論」は、当該学問領域の概念整理と構造化を行うものである、と筆者は理解する。したがって、本稿においては、「国際地域文化論」が内包する基本的概念が第1の考察対象となる。

「国際地域文化論」は、文字通り、「国際」と「地域」の両概念との関連の下で展開される「文化」論である。それでは「国際」と「地域」との関連の下でどのような「文化」論の輪郭が見えてくるのであろうか。

試みに「文化」に「国際」を直接結合させてみよう。しかしこの場合、「国際文化」という1つの実体を表現している例は皆無といってよい。「国際文化」という語が用いられる場合は、ほぼ例外なく「〈文化〉の〈国際〉的な比較（あるいは関係）」という内容をもっている[1]。「国際文化」が云々される場合には、個別「文化」間相互の関係性が念頭に置かれることが多いのである。それは「国際」という語の語義によるところが大きいだろう。これに対して、「地域文化」が、ある実体を表現することはいうまでもない。「地域」と「文化」は、関係性を表す概念ではなく、存在を表す概念であるからである。したがって、「国際地域文化論」は「〈地域文化〉それ自体」と複数の「〈地域文化〉間の相互関係」を研究対象とする、ということができる。

以上の事柄を踏まえながら、最初に「国際地域文化論」の基幹である「文化」を定義づけ、続いて「地域」、「国際」の順に定義づけを行う。「地域」を「国際」に先行させるのは、「地域」が「国際」に先立つ概念であると考えるからである。

「地域」は、ミクロな領域からマクロな領域への広がりをもつ術語であり、「国際地域文化」という場合の「地域」は、当然マクロな視点から捉えた「大きな地域[2]」を意味しているが、筆者が担当するいわゆる「まちづくり論」への導入をも意図する本稿では、ミクロな「地域」を意味する「まち」についての考察をも重視することとする。そこで、「国際・地域・文化」の考察後に、ミクロ領域に視点を移動させて、「まちづくり論」が取り組むべき諸課題について検討する。

「国際地域文化論」は「観光創造」への貢献も期待されているが、「国際地域文化論」の一翼を担う「都市文化論」が考察対象とする「まちづくり」は、そもそも「観光」との間に高い親和性をもっている。そこで、本稿の末尾では、「まちづくり」と「観光」の関連性について言及することになる。

►1 ただし“global culture”という英語の表現は存在する。この場合、「ある特定の文化の地球規模での広がり」というニュアンスが強い。つまり、“international”が含意する「複数性」との差異が、そこにはある。

►2 北海道大学スラブ研究センター監修・家田修編（2008）『講座スラブ・ユーラシア学1　開かれた地域研究へ―中域圏と地球化』講談社　P.94

筑和正格 TSUKUWA Masanori

# 2 「文化」

## 2.1.「文化」とは何か

この節では、私たちが日常の様々な場面で用いる「文化」という語について、いくつかの定義例を参照する。

「文化人類学の父」と称されるエドワード・タイラーは、その著書『原始文化』の中で、

> 文化または文明とは、知識・信仰・芸術・道徳・法律・慣習その他、社会の成員としての人間が獲得するあらゆる能力や習慣の複合的総体（complex whole）である[3]、（下線筑和、以下、断りがない限り、同じ）

と定義している。興味深いのは、ここの定義は「文化」と「文明」を同一視しているのに、書籍のタイトルが示すように、「原始文化」は「文明」視されていないということである。しかし、様々な議論の的となりうる「文化と文明」というテーマは、本稿では扱わないことにする。

タイラーは、あらゆる文化は低次なものから高次なものへと発展して行くという進化論的な考え方をもっており、その意味で彼の考え方は同時代の枠内に留まっているが、彼の下した、文化を広領域的な人間の活動における能力と習慣と捉える定義そのものは、時代を越えて有効性を保っている。つまりタイラーは、文化を、人間の社会的集団生活の様態を表すものとして規定し、学術用語としての文化の概念を確立させたのである。

この定義に関しては、「文化」が「集団的なもの」であるという指摘に注目しておこう。

アメリカ人の観点から日本文化を論じた『菊と刀』の著者として名高いルース・ベネディクトは、

> 人間同士をほんとうに結びつけているのは、かれらの文化――つまりかれらが共有する考え方や価値基準である[4]、

と解説し、タイラーと同様に文化の構成要素である「慣習」に注目し、さらに文化の「多様性」と「統一性」について論じる[5]。また、ネイティブ・アメリカンの首長が語る「粘土のコップ」の比喩[6]を通じて「民族の価値基準と信念の体系全体[7]」としての文化を指摘する。ここに示される、「慣習」に織り込まれた、集団の構成員が「共有」する「価値基準」は、後段でも触れるように、文化の考察において基本的な概念をなすものである。

アメリカの代表的人類学者の1人、クライド・クラックホーンは、文化概念を多様な視角から考察・検討したことで知られている。クリフォード・ギアーツは、そこに「タイラー流の文化に関する平凡な理論化が陥っ

►3 Tylor, Edward Burnett (1871) *Primitive Culture.*（比屋根安定訳（1962）『原始文化』誠信書房　P.1）

►4 Benedict, Ruth (1934) *Patterns of Culture* Houghton Milfflin Co., Boston（米山俊直訳（1973）『文化の型』社会思想社　P.43）

►5 同上　第1章～第3章

►6 「粘土のコップ」とは、神がすべての「インディアン」に与えたもので、彼らの「仲間の人生に意味を与えていたもの」「民族の価値基準と信念の体系全体」（＝「文化」）を意味している。首長は、「技術革新」（＝西欧文明）によって、今ではそのコップが「こわれている」というのである。同上PP.49-50

►7 同上P.50

た概念上の混迷[8]」への反応を見てとっている。つまり、クラックホーンは「複合的総体」の内容を、個々の点において具体化させているのである。このことによって、「文化」を考察対象とする際のアプローチのあり方がより明確になる、という効果がもたらされた。彼が下した定義の中で本稿における考察にとって有効なものを挙げれば、

①文化は、集団社会が蓄積した知識をしまっておく倉庫のようなものである。
②個人はある特定の集団に属する結果として文化を習得するのだが、習得した経験のうち他人と共通している部分が文化になる。
③文化はいたるところでわれわれの生活を規制している[9]。

となる。

上記3者による「文化」の定義で注目すべき点は、「文化」が「集団的なもの」であり、また集団の成員の「価値（意識）」に関わるものである、ということである。

カルチュラル・スタディーズの研究者レイモンド・ウィリアムズは、次のように文化を定義している。

文化の定義には3つの範疇がある。第1に、文化を「理想（ideal）」と考える範疇がある。ここでは、文化は、ある絶対のあるいは普遍的な価値に基づく、人間の完成された状態、あるいは、完成に至る過程である。……第2に、文化を「記録（documentary）」と考える範疇がある。ここでは、文化は知性と想像力を働かせて作られたものの集まりであり、細かなところまで、人間の思考や体験が多様な形で記録されているものである。……第3に、文化の「社会的な（social）」定義がある。この定義では、文化は、特定の生活の仕方の記述（a description of particular way of life）である。特定の生活の仕方は、ある種の意味と価値とを芸術や学問（art and learning）の中だけでなく、諸制度や日常的行動の中にも表現する。……この分析は、生活の仕方の中にある要素で、他の2つの定義に従う者には全く「文化」ではないもの、たとえば生産の組織、家族の構造、諸々の社会関係を表現もしくは規定している諸制度の構造、その社会の構成員がコミュニケートする時の独自な形式、の分析をも含んでいる[10]。

第1の範疇が示すものは、「芸術」であり、第2の範疇とは「学問」を意味している。ウィリアムズの見解では、これら2つは上流社会の文化、いわゆるハイカルチャーであるのに対して、第3の範疇は、それ以外の人々の文化、庶民の「生活文化」を指している。この第3の「社会的」範疇は、前に紹介した3者の定義と同類のものであるが、その前にわざわざ第1、第2の範疇が置かれている。これは何を意図しているのだろうか。

3範疇の列挙は、「芸術」と「学問」が文化であることは自明であるが、

►8 Geertz, Clifford (1973) *The Interpretation of Cultures* Basic Books, New York（吉田禎吾他訳（1987）『文化の解釈学Ⅰ』岩波現代選書118　P.5）

►9 Kluckhohn, Clyde (1949) *MIRROR FOR MAN: Anthropology and Modern Life*（外山滋比古十金丸由雄訳（1971）『文化人類学の世界』講談社現代新書255　PP.44-48）

►10 Williams, Raymond (1965) *The Long Revolution*. Haper & Row, New York PP. 41-42

カルチュラル・スタディーズは、それらよりも「生活の仕方」に焦点を合わせるのだ、という宣言を意味している。そして、この、英雄的個人の業績（芸術・学問）よりも集団的なものに注目するという姿勢は、まさに文化研究の20世紀的特質を如実に表している。加えて、下線を施した部分のうち、特に「生産の組織」、つまり経済のあり方のうちに文化の重要なものを見るという、かつてマックス・ウェーバーも重視した観点は、後述の「まちそだて」論との関連において、注目すべき視点である。

「文化の解釈学的理論」の構築に努めたクリフォード・ギアーツは、「少なくとも内的に統合し、いっそう重要な点として、はっきり問題を決めて論じうる文化の概念[11]」を提唱する。彼による文化の定義はこうである、

> 文化は、象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表している[12]。

「象徴に表現される意味のパターン」「象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系」というとき、ギアーツが念頭に置いているものは「宗教」、「イデオロギー」などである。「文化」が「意味ある象徴の体系[13]」であるならば、文化の理解のためには、当然、象徴を解読する必要が生じてくるが、「象徴の解読」とはいかなる作業なのだろうか。象徴の「分析」とは、「暗号解読」ではなく、「意味の構造をえりわけることである[14]」、とギアーツはいう。ギアーツによれば、「概念とは象徴の『意味』である[15]」から、「意味の構造をえりわける」とは、しかるべき「概念」を整理することである。ここに示される「〈象徴の解読〉あるいは〈文化の解読〉は、〈概念〉の発見と整理である」という見解も、後述の「まちそだて」と「文化のデザイン」に対して重要な示唆を与えるものである。

文化の定義は、基本的には以上で十分であるが、「まちづくり論」における重要な視点に関わるものとして、さらにもう1つの定義を提示しておきたい。それは、

> 文化とは、個々人によって、または集合体によって特に「価値がある」と格づけされる、人間の生の営みもしくは行動様式であり、これらはその担い手たちに対して共通の目標と行動のガイドラインを提示し、それに従うことを要求する、規範システムである[16]、

という定義である。

「重要な視点」と言ったのは――上で紹介した研究者たちによる文化の定義においても「価値」が指摘されているが――この定義が「価値」それ自体に直接言及しているからである。人間集団が示す一定の生活様式（＝文化）にはある価値意識が反映されており、この価値意識が生活様式の特質を規定している。そして、筆者は、「まちそだて[17]」の営為においても、

►11　Geertz（吉田他訳）P.6

►12　同上P.148

►13　同上P.79

►14　同上P.15
►15　同上P.151

►16　この定義は、*Meyers Groβes Taschenlexikon in 24Bänden* Bd. 12 (1992) Taschenbuchverlag, Mannheim S. 232の内容を筆者がまとめたものである。「自然科学」に対して「文化科学」を提唱するリッケルトは、「文化の客観的な形態」として「宗教・法律・国家・道徳・学問・言語・文学・芸術・経済等」を挙げている：Rickert, Heinrich (1926) *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft* Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen S. 22.
►17　本稿の「5. 2」参照。

「価値意識」がきわめて重要な、あるいは決定的な役割を果たすと考えている。文化現象の考察においては、このように「価値」の問題は不可欠の要素となっていることを、改めて強調しておきたい。

## 2.2.「文化」の保守性

次に、「文化」についての、ある人物の発言をとりあげることにする。それは、その発言内容が「文化」という概念がもつ重要な特徴を如実に表出しているからであり、それを検討することで、文化概念の理解がさらに深まると考えるからである。

> 精神と政治の差異は、文化と文明、魂と社会、自由と選挙権、芸術と文学の差異を包括している。そしてドイツ精神、これは文化であり魂であり自由であり芸術であって、文明、社会、選挙権、文学ではないのだ。精神と政治の差異は、さらに例をあげれば、コスモポリタンとインターナショナルの差異である。コスモポリタンの概念は文化の領域に由来するもので、ドイツ的であり、インターナショナルの概念は文明とデモクラシーの領域に由来するもので、全く別のものである。民主的なブルジョワは、いたるところでいかに国民的なよそおいをこらそうとも、インターナショナルである。これに対して市民は――これも本書の一モティーフである――コスモポリタンである。何故かと言えば、市民はドイツ的であり、王侯や「民族」よりもドイツ的だからである。地理的、社会的、心的な「中間」の存在たるこの市民という人間は、つねにドイツ的精神性、人間性、そして反政治の担い手であったし、今後もそういう存在でありつづけるのだ[18]。

これは、ドイツを代表する作家の一人であるトーマス・マンが、第一次大戦の末期に、ドイツの敗色が濃厚な状況下で執筆した『非政治的人間の考察』の一節である。ここでは激越な調子で「文明」に対する「文化」の擁護論が展開されている。とはいえ、マンの発言を、単純な「アンチ文明論」として捉えることは避けなければならない。マン自身が、「文明」と「文化」の二元論を自らの問題として内面に抱えていたからである。いずれにせよ、ここに示された「文明対文化」の二項対立図式もなかなか興味深い。しかし、前述のように、本稿ではこの図式を脇に置き、「文化」の換言例を追ってみたい。「文化」は「精神、魂、自由、芸術、コスモポリタン、市民（Bürger）」と言い換えられ、そして「文化」を体現する「市民」が、それまでと同様に、存在し続けることが宣言されている。「『人類』の民主的な文明社会、すなわち社会的民主的普遍的共和国（la république sociale démocratique et universelle）、人間的文明の帝国（empire of human civilization）を目標とするあの精神傾向[19]」によって、すなわちフランスとイギリスが体現する「文明」によって、「窮境に追いこまれ[20]」た「ドイツ的本質[21]」の保持が試みられているのである。そして、「本書は公然とこの進歩を相手に戦い、これに対して保守的な抵抗を行っている」、あるいは「本書は、何

►18 Mann, Thomas (1918) *Betrachtungen eines Unpolitischen*（森川俊夫他訳（1972）『非政治的人間の考察』『トーマス・マン全集XI』新潮社 P.27）

►19 同上P.33
►20 同上P.12
►21 同上P.33

はともあれこの進歩を否定するために、進歩一般を否定する[22]」と、保守的な立場が明示される。

これは、自己のアイデンティティが消滅の危機に陥り、それを死守する必要に迫られるとき、人はしばしば、曖昧で捉えどころがないが、それでいて心理的な拠り所となる「文化」という概念に助力を求める、という現象の典型的な例である。クラックホーンは、「文化の本質の選択性」に関連して、「ひとたびある情況の処理法が確立してしまったら、それを変えようとしたり、そこから逸脱しようとすればつよい抵抗に会うものと覚悟しなくてはならない[23]」と、文化が内包する保守性を指摘している。また、タイラーやベネディクトが指摘しているように、文化が、反復性や継続性をもつ「慣習」と連関しているのであれば、そこからも「文化の保守性」を看取できるのである。

たとえば、「比較文明論」を提唱する文化人類学者の米山俊直は「文化の保守性」について次のように解説している。「文化は本質的に保守的で、新しいものに拒否反応を起こします。また、異文化に対して反発し、敵対することもあります。文化摩擦はそこでおこります。日米経済摩擦は典型的な文化摩擦であります。摩擦ですめば、話し合いで解決もできるでしょうが、それは時に紛争の種になり、戦争をも招きかねません。各地の民族紛争、民族の対立を理由にした殺戮は、この文化の保守性に由来しています[24]。」ここで指摘されている「保守性」は、同時に、他者の「文化」を許容しない「排他性」をも示している。上で見たマンの言説からも、むろんこの「排他性」が容易に読み取れる。

確かに、文化の保守性は、集団や社会に安定をもたらすものではある。価値意識が揺さぶられたり、習慣が阻害される状況が生起するならば、人心は平静さを失い社会は不安定なものとなるだろう。しかし、これは集団内の事情であり、この集団内の安定性が、集団外に対しては排他性や差別を意味する場合も、十分にありうるのである。文化の保守性が、集団内部には心地よさをもたらしつつ、外部に対しては排他性を示す場合、この二律背反状態の打開策はありうるのだろうか。

この点は、本稿の考察対象の1つである「まちそだて」に関わる重要な問題である。したがって、後段で「まちそだて」を論じる際に再度検討対象として取り上げることにする。

以上、文化を主として人間（集団）の生活様式という面から規定した上で、文化の認識困難性を確認し、文化と価値観との関係や文化の保守性について考察を加えた。これらの考察を踏まえて、次に「地域」という概念の整理を行うこととする。

►22　同上

►23　Kluckhohn（外山他訳）P.47

►24　1997年3月3日に北関東・新潟地域連携軸推進協議会（高崎市）で行われた講演より。
http://www.tg.rim.or.jp/~kanai/philosophy/t1997/yoneyama.htm

# 3 「地域」

## 3.1.「地域」とは何か

「地域」とは何であろうか。辞書の定義を見ると、「①区切られたある範囲の土地。②政治・経済・文化の上で、一定の特徴をもった空間の領域。全体社会の一部を構成する。③国際関係において一定の独立した地位をもつ存在[25]」、と解説されている。ここに見られる「区切られたある範囲」「一定の特徴をもった……領域」「独立した地位」という表現は、「地域」概念が、何らかの指標（Merkmal）によって他から差異化された空間として想定されていることを示している。つまり、「地域」はある種の「枠」、あるいは「境界」を備えた概念である、ということができる。

それでは、「地域」という語は具体的にはどのように使用されているのか。この語は、きわめて高い多様性・多義性をもって用いられているようだ。一般的な解説にしたがえば、「地域」は日常的な日本語では「近所、地区、村、町、郷土、地方、国、大陸」を指すほか、「市町村や都道府県など法的な区域」を意味する語としても用いられる。さらに、「学術用語として使用される場合には……英語に根拠を求められがち」なようである。英語で「地域」を意味する語としては「area、community、district、region、zone」等々があり、それらの中で「日本の研究者が念頭においているのは、多くの場合、リージョン（region）かコミュニティ（community）」だとのことだ[26]。

上に提示された用語のうち「エリア」と「リージョン」の両者は、類似した意味でも使用されるが、どちらかといえば「エリア」がより一般的な意味をもつのに対して、「リージョン」の方は、「特定の機能によって構成される空間的広がり[27]」として把握されることが多いようである。また、「コミュニティ」は、基本的に[28]「地域性と共同性をもったある一定の実体[29]」を表現する語であるようだ。本稿においても、「日本の研究者」の例にならって、「地域」という語を、基本的に、「リージョン」と「コミュニティ」の意味で使用することにしたい。

「リージョン」も「コミュニティ」もその大きさは様々であるが、本章ではひとまず市町村レベル以下の規模の「地域」を念頭に置いて考察を始めてみたい。つまり、その中に住む人々が同胞に出会ったり、彼らについて聞くことが可能な範囲の「地域」を第一義に想定している[30]。ただし、「地域」として「枠」をはめる限り、国や国家群といった「大きな地域[31]」についても、基本的には「小さな地域」と同様の議論が可能であると考えている。

## 3.2. 地域文化

ある「地域」において、人々が特定の「気候・風土・地形[32]」条件のも

►25 『大辞林』1988年版より。

►26 藤田弘夫（2006）「第1章　地域社会と地域社会学」『地域社会学講座1　地域社会学の視座と方法』東信堂　PP.11-12

►27 地域社会学会編（2000）『キーワード地域社会学』ハーベスト社　P.148

►28 ここで「基本的に」というのは、「コミュニティ」という語は、「新たに構築すべき規範的な存在として把握されることもある」（同上P.149）からである。

►29 同上P.149

►30 ベネディクト・アンダーソンのいう「想像の共同体」としての「ネイション」が生活する「地域（仮に「国」と呼ぶ）」を対象とする場合には、「個性」や「独自性」はより曖昧性を高めることであろう。もっとも、アンダーソンは、「日々顔付き合わせる原初的な村落」をも「想像されたものである」と見なしている：Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities*（白石隆・白石さや訳（2007）『定本　想像の共同体　ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山 P.24-25）。

►31 注2参照。

►32 地域社会学会（2000）P.236

とで、社会生活を一定期間継続するうちに、独特な生活習慣や思考形態、さらに共通の価値観が生成して、時間の経過と共にそれが内面化されるというケースは、多数存在するだろう。この独特な要素を含む生活様式全体は、「一つの独自性をもつ全体[33]」として「地域文化」と呼ばれるわけである。「ドイツ精神」の「独自性」や「個性」を強調する前掲のトーマス・マンの文章も、当然「地域文化」の主張の一例と見なすことができる。そして、「気候・風土・地形」条件を初めとする地域の「枠」は、世界を視野においても日本国内だけで見ても多種多様であるので、「地域文化」もきわめてバラエティに富んだものとなりやすい。

しかし「地域文化」は、「文化」一般がそうであるように、内面化されているがゆえに、地域内の生活者によって必ずしも日常的に意識されないことはすでに指摘したとおりである。それが意識化されるのは、非日常的な事態の発生によって、通常ほとんど無意識に行われていた生活習慣が異化されたときや、異なる生活習慣や思考形態をもつ他者と遭遇したときである。他者との遭遇の際立つ例を2つ挙げるとすれば、それは「戦争」と「観光」であろう。

戦争状況が自然科学の発展を強く促すことは、20世紀の歴史が教えている。しかし、戦争は社会科学の領域においても新しい学問分野を創出した。第2次大戦時に行われた敵国研究が、戦後の地域研究へと発展していったのがその1例である。対日本戦の最中に、すでに勝利を自明視していたアメリカは、戦後の占領政策を効果的・効率的に実行するために、日本人と日本社会を正確に理解する必要に迫られていた。それは、いうまでもなく、日本人の行動や日本社会のあり方が、アメリカにとっては異質なものであり、統治の前提となる日本社会の全体的把握を困難にしていたからである。戦時情報局の依頼を受けて、この異質性（他者性）の分析と理解という任務を負ったのが文化人類学者のルース・ベネディクトであった。彼女が在米日系人への聞き取り調査や文献調査の結果まとめたのが『菊と刀』であり、この研究がアメリカの占領政策立案の礎をなすと同時に後続の地域研究に対する刺激剤となったことは、あまりにも有名である[34]。

この歴史的事実から、私たちは次の3点を読み取ることができる。第1は、「地域」の「独自性」や「個性」は、往々にして「難解さ」を伴いがちであるという、上述の「多種多様」さに関連する点である。第2は、ベネディクトは、日本という異質な地域社会の理解のために、個々の事例・現象を通じて「日本人多くの行動や考え方の間の相互の内的連関を追究し、種々の行動や考え方がその特殊な連関において構成するところの全体構造を把握する[35]」ことを目指したが、この事実は、ある地域のアイデンティティの理解は、その「地域」の「文化」の理解を通じて行うことが有効であることを示している、という点である。そして、第3に、『菊と刀』は、日本人の間に賛否両論を巻き起こしながら、「通常ほとんど無意識に行われていた」自分たちの「生活習慣」を日本人に見せつけた、という点である。

以上で検討したことを踏まえて、あらためて指摘しておきたいのは、「地域」研究とは、煎じ詰めれば「地域文化」研究なのだ、ということである。

►33　橋本満（1998）「第10章　地方の創造」『地方文化の社会学』世界思想社　PP.237-238

►34　Bnedict, Ruth (1946) *The Chrysantheum and the Sword-Patterns of Japanese culture*, Boston（長谷川松治訳（2005、底本は1972）『菊と刀』　PP.3-4、11-33）／加藤普章編（1992）『エリア・スタディ入門　地域研究の学び方』昭和堂　P.4／細谷雄一・矢澤達宏編（2004）『国際学入門』創文社　P.104

►35　川島武宣（1972）「評価と批判」『菊と刀』　P.393

アメリカ戦時情報局が、ほかならぬ「文化」人類学者に敵国の調査を依頼した意味は、まさにその点にある。

## 4 「国際」

「国際」という用語を英語の“international”の意味で考えるならば、それは基本的に「近代」以降の世界を対象とすることを意味する。というのも、“international”は、いうまでもなく“nation”の存在を前提にしているが、ヨーロッパに起源をもつこの“nation”という語が人々の間で特に意識化されるのは、主として市民革命以降のことだからである。“nation”に関して、「近代の国民国家形成過程において作り上げられたものである」とする「近代主義」と、「nationに先行するエスニック共同体」に注目して近代主義に批判を加える「原初主義」があるが、しかし“nation”が近代以降の社会で特に明瞭に意識され始めた用語であることについては、両者の間に解釈の対立はないようである[36]。

むろん、“nation”という語が浮上する以前に「国際」という感覚が存在しなかったわけではない。この点に関する細谷雄一の解説を要約すれば次の通りである。「17世紀の30年戦争によって、それまで『キリスト教共同体』として1つの全体性をもっていたヨーロッパ世界が変化をきたし始めた。むろんこの宗教戦争には経済利益の問題や王朝間の対立が絡んでいたが、いずれにしてもヨーロッパは一体性の世界から多元性の世界へと変貌した。この過程で成立したのがフランスやイギリスという中央集権の国家であり、これらの国々が“state”と呼ばれる『近代主権国家』である。17～18世紀には、この国々によってヨーロッパ国際社会が形成された[37]。」

つまり、17世紀ヨーロッパでは、それまで存在していた大きな枠が取り払われ、いくつかのより小さな枠が成立してきたが、そのことによって「枠と枠の関係」が重要性を帯びるようになったのである。主権国家間の、政治的、経済的、軍事的、文化的な関係を何らかの形で処理・調整しなければならないという現実が、「国際」的発想を生み出すこととなった。

「国際」関係は、19世紀末以来、ヨーロッパ諸国による植民地獲得運動、ならびにアメリカや日本といった非ヨーロッパ諸国の国際社会での台頭によって地球規模で拡大していったが[38]、この動きは20世紀に入って世界の各地域で“nation”の意識をより先鋭化させ、「ナショナリズムの発展とそれに伴う植民地の独立」という現象を導き出す結果となった。かくして、“nation-state”が構成する「国際」社会は文字通り“inter-national”な色彩を帯びるようになったのである。

しかし、2度の世界大戦は、「国際」関係をさらに変動させた。第2次大戦後、それまでのヨーロッパ中心の「国際」関係が、アメリカとソ連によ

▶36 アンダーソン（2007）P.22。ここには「ナショナリティ、ナショナリズムといった人造物は、……18世紀末にいたっておのずと蒸留されて創り出され……」と解説されている。また同書P.25には「国民の概念は、啓蒙主義と革命が神授のヒエラルキー的王朝秩序の正統性を破壊した時代に生まれた」という記述がある。これは明確な「近代主義」の立場である。それに対して、「Smith, Anthony D. (1986) *The Ethnic Origins of Nations*（巣山靖司・高城和義他訳（1999）『ネイションとエスニシティ―歴史社会学的考察』名古屋大学出版会」では、「エトニ」というエスニックな共同体を起源として「近代世界におけるネイション創造」（P.180）が行われた、とネイション形成における原初主義的要素が指摘される。大澤真幸は、スミスの議論を批判して「この説明は、ネーションの起源をエトニに求める点で原初主義的であり、ネーションへの成熟を近代に見出す点で道具主義（近代主義）的である。……これは、理論的な統合というより、単に二つの立場を継ぎ足しただけの合算の域を越えない」という：大澤真幸（2007）『ナショナリズムの由来』講談社 PP.72-73。

▶37 細谷・矢澤（2004） PP.16-18

▶38 同上 PP.19-20

る「双極的[39]」な構造へと変化し、それが46年間にわたって継続した。この、いわゆる「冷戦構造」を、大澤は「二つの普遍主義的な理念（社会主義と自由・民主主義：筑和注）によって世界の全体が分割されている状態を指す[40]」と解説している。だが、この構造も、1991年にソ連が解体することでさらに変貌をとげた。現在はアメリカが、いわゆる「超大国」として政治経済等の領域で大きな存在となっているのは周知の通りである。

「国際関係の型は、国際関係におけるパワーの配分によって、多元的、双極的、ならびに帝国的体系の3つに区分される[41]」という説に従えば、冷戦後の国際関係においては、冷戦に勝ち残ったアメリカが「帝国的」地位を占めていることになるのかもしれない。しかし現実の事情は、そう簡単に説明できるものではない。それは、1つにはアメリカの政治経済力が実際には絶対的優位性をもっていないからであり、また「破綻した社会主義国の中で、ナショナリズムの波が顕在化してきた[42]」からである。つまり、理論的には、「冷戦の二項対立の一方の極の崩壊は、二つの普遍主義が併存するという矛盾が解消し、理念の普遍化が実質的なものになる」はずなのだが、二項対立の解消が現実に露呈させたのは「地球規模の世界国家への運動ではなく、逆に、局地的なナショナリズムだった[43]」からである。冷戦構造の崩壊は、普遍主義の徹底化ではなく（「国家」にあらざる「ネイション」の）ナショナリズムの激化をもたらしたのである。さらに、いわゆる「9．11」以降は、イスラム・テロリズムが、「超大国」アメリカの支配に抵抗を続けているが、この構図も、西洋とイスラムという文明の衝突であるとともに、そのような多元化の1現象なのである。

比類のない強大なパワーをもつ「地域」が存在し、他の地域を支配するという構図なしに「国際」社会が安定性を獲得するためには、「個性」や「独自性」を内包する「地域」間の関係を何らかの形で調整する必要がある。その際、もし「地域」間相互の差異性を止揚する普遍性が発見・獲得（あるいは虚構）できるのであれば、おそらく最も円滑に調整が実現することだろう。しかし、普遍性の構築と貫徹は、現実にはきわめて困難であるようだ。つまり、普遍主義を志向するはずの運動が、たやすく特殊主義へと転換してしまうケースが歴史には存在するというのである[44]。その端的な例が、1914年8月に第一次世界大戦が勃発したとき、開戦の一週間前には「反戦」と「諸国民の国際的友愛ばんざい」を叫んでいたドイツ社会民主党が、「愛国主義に走って、戦争に協力した[45]」事実に現れている。この「ナショナリズムと普遍主義とのねじれた共存関係」を、本稿でさらに追跡する余裕はないが、「国際地域文化論」は、具体的な文化現象の考察を通じて、「国際」と「地域」という、二項対立的／相補的な概念の内実と相互関係を検証することも視野に収めるべきではないかと思う。“international”な現象は“intercultural”な現象なのであり[46]、「国際地域文化」研究は、この“intercultural”な文化事象の、錯綜的でcommunicativeな連関の解読を試みることも要請されているのである。

以上、「文化」「地域」「国際」について、基本的な定義づけを行った。こ

►39 『ブリタニカ国際大百科事典7』（1973）P.425

►40 大澤（2007）P.56

►41 『ブリタニカ国際大百科事典7』（1973）同上

►42 大澤（2007）P.57

►43 同上

►44 大澤（2007） PP.28-30、PP.58-63

►45 前田敬作と山口知三による「解説」より：前田敬作・山口知三訳（1968）『非政治的人間の考察』（上）筑摩書房 PP.344-345。

►46 大澤（2007）PP.102-103：「ネーションは、基本的には文化的な単位である。…ネーションは、すでに述べたように、生活様式の同一性によって区画するほかない。このことは、言い換えれば、ネーションが文化の同一性によって定義されるということである。」

の定義づけに基づいて、次のようにいうことができるだろう：「枠」をもつ「地域」はある「独自性」を備えており、その「独自性」を核として「地域文化」が形成されるが、この「地域文化」にはその担い手の「価値観」が刻印されている。「国際」とは「大きな地域間相互の関係を指すが、それは同時に「地域文化」と「地域文化」の関係でもあり、したがって個別の「価値」相互の関係である、と。



# 5 都市と地域と「まち」

本章の表題の一部に「まち」という語を採用した背景には、日本社会を考察する際に、都市と農村を二分し、それぞれを独立した地域と見なして、個別にその特質を探るという研究方法が、近年再考を迫られている、という事情がある。つまり、経済・社会状況の変化は、「都市と農村を含む地域」という、両者を連続したものと見る、文字通りの「地域文化論」の観点設定を要請しているのである。そして、この「都市と農村を含む地域」における「まちcommunity」のあり方が、今、問われている。したがって「まちづくり論」も、そうした了解の下で展開されることになる。

また、本章においては、共同体としての「まち」を文化的観点から考察する「文化論」のアプローチと、その文化的要素を踏まえて、「まち」をいかに育成すべきかを考察する「経営論」のアプローチが共存することを、あらかじめ断っておく。

## 5.1 都市と農村の関係の変化

1955年から1974年の高度経済成長が日本にもたらしたものは、全国的な都市化の進展であり、都市的生活様式の浸透であった。「スプロールや混住化[47]」の拡大は、「全般的都市化」を推し進めて都市と農村の区別を曖昧なものとし、その結果「人々の完結的な生活が繰り広げられる局地的な小宇宙としての都市、農村の実態を喪失させ、人々の生活が全体社会・国家レベルから市町村・近隣までの重層的な地域社会の関連のなかで繰り広げられるという事態を生み出した[48]」のである。そして、この状況が、都市社会や農村社会の研究者に、「都市・農村に通底する論理[49]」の探究を志向させるようになった。

しかし、都市と農村を連続体と捉える観点がこれまで皆無であったわけではない。たとえば、柳田國男は、日本では都市と農村が一体性の歴史をもっていたと論じており[50]、また、農村社会が内包する「家と村」の構造が都市社会でも観察できるという指摘もすでに行われているようである[51]。これらは、上段で述べた「全般的都市化」とは逆の、「村的要素の全体社会への浸透」であり、「文化の保守性」論を実証する指摘ともとれるが、それ

►47 地域社会学会（2000）P.2

►48 同上P.11
►49 同上P.12

►50 柳田國男（1929）「都市と農村」『柳田國男全集29』ちくま文庫（1991）特に「第一章　都市成長と農民」 PP.338-357
►51 地域社会学会（2000）P.15

はさておき、要するに、現在要請されているのは、これらの特質の複合体として「地域」を把握し、分析し、理解することなのである。

こうした背景のもとで、「まちづくり論」は、市町村における、いわゆる「コミュニティ」形成のあり方を、主として文化論の立場から考察するのだが、この「コミュニティ」を、たとえそれが地方自治法で「村」と規定された地域におけるものであっても、「まち」と名づけることにする。「まち」という語は、むろん都市に起源をもつものであり、「村」にはなじまないという印象もなしとはしないが、生活様式の全般的都市化という社会傾向の下では、村の共同体を「まち」と称しても、その呼称の違和感は極端に大きくはないと考えるからである。

## 5.2　北海道の「地域」的特性

地域観察の眼を北海道に向けるならば、そこにはきわめて特殊な事情が看取できることを、筆者は以前指摘した[52]。つまり、北海道34「市」のうち、市街地の部分が農地よりも広い都市は5つだけで、あとの29市はすべて農地部分が市街地よりも広いのである。そして、これらの都市は農業を基幹産業とする例が圧倒的なのだ。したがって、経営論の観点から北海道の「まちづくり」を考察する場合には、「まちと農業」の関係を観察する視点を設定することが自明であり不可欠なものとなる。

また、上述の「家と村」の要素についても、開拓が明治以降である北海道の場合は、長い歴史と伝統をもつ日本の他地域のケースとは異なった現実があるのかもしれない。「家」における家父長制や「村」の封建的要素の強度はどれほどのものであろうか。もちろん、北海道の各地域においても何らかの閉鎖性は存在するようではある。菅康弘は「開拓の歴史が浅く伝統色の薄い北海道でさえ、移住者を迎え入れる側の態度においてある種の揶揄や軽い非難が多々みられる[53]」ことを指摘している。にもかかわらず、北海道の諸地域の開放性は一般的に認知されていよう。たとえば、筆者は、富良野に取材した映像事例において、人物たちが構成する「地域」社会空間に、「平等性」「対話性」と並んで「開放性」を認め、そこにおける人間関係の底流にあるものを「響感（antiphonal feelings）」と仮設したことがある[54]。

もし北海道以外の地域との間に有意な差異が認められるのであれば、私たちは、文化論と経営論を組み合わせた観点から、地域共同体の「北海道モデル」を構築できるかもしれない。

## 5.3　「まちづくり」と「まちそだて」

本節では、「まちづくり」と「まちそだて」についての論点を整理し、「まちそだて」の内実について検討する。

一般的に、「まちづくり」について、その地域の当事者が中心となり、行政や企業とも連携して、良好な生活環境を創造すること、という説明が可能である。しかし、「まちづくり」ということばの日常化による、この用語の形骸化を指摘する延藤安弘は、新たな用語として「まち育て」を提唱す

▶52　筑和正格（2005）「『都市』と『公共性』に関する一考察」『都市公共性と文学』国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書61北海道大学　P.15

▶53　菅康弘（1998）『地方文化の社会学』　P.162

▶54　2007年度の「公開講座」と修士課程の授業「現代都市文化論演習」において、富良野の「まちそだて」に関する映像事例を提示し、事例が示す共同体の「開放性」を指摘した。

る。その理由として、彼は、行政主導の「拠点的・基幹的整備事業」も「まちづくり」と称されるようになり、「言葉の本来的意味の輝きをなくしてしまった[55]」という事実を挙げている。延藤のいう「まち育て」の鍵は、それが「持続的」営みであり、同時に「それにかかわる人間の意識・行動も育まれていくプロセス[56]」であるという点にある。

上段で、何の断りもなく「当事者」という用語を用いた。この語は、きわめて重要な意味をもつものと筆者は考えるが、それでは「当事者」とは誰のことを指すのだろうか。

「まちづくり」の、あるいは下で述べるように「まちそだて」の「当事者」とは、単にその「まち」に居住しているだけの人間を指すのではない。「まちそだて」に深い関心をもち、その営為に積極的に参加する人間は、無関心な人々に比べれば「当事者」としての資格をもつといえよう。しかし、ことばの本来の意味における「当事者」の資格は、それだけでは十分ではない。十分な「当事者」の資格は、その「まち」に密着して生産・流通行為を行う者に認められる、と筆者は考える。「密着」とは、自分が居住する「まち」を唯一の活動基盤とし、際限なき経済的利益追求のための事業の広域展開は意図的に避ける（＝「スモール・ビジネス」の実行）、という意味であり、したがって、グローバルに経済活動を展開しうる大企業は、十分な「当事者」の資格はもたないことになる。また、短期間の「まち」の居住者（転勤族などの転居可能性をもつ人間）や「まち」への来訪者も同様に十分な「当事者」資格をもたない。端的にいえば、その「まち」で生計を立てざるをえない人々のみが、「当事者」となりうるのである。そして、ここに述べた「当事者性」は、筆者がこれまでに収集した全ての事例においても、その意義が確認されたことを付言しておく。

さて、「まちづくり」の次の段階にあるべき当事者の営為――しかも、成功と失敗のサイクルを超克したを営為――を、筆者は「まちそだて」と呼びたい。そして、「まちそだて」は、「経済的要素」の重視を前提とした、「内面化された共通の価値観に立脚した営み」、あるいは「当事者を共通の価値の内面化に導く営為」であるときに、初めて現実化すると想定する[57]。ベネディクトが定義しているように、「内面化された共通の価値」とは「文化」の謂であるから、「まちそだて」とは、「文化」を認識しそれを何等かの形で表現（＝現実化）する行為ということができそうだ。しかし、そうであるならば、「まちそだて」はかなり困難な営みであるといわざるをえない。その理由の1つは、すでに私たちが検討したように、「文化」は私たちが容易に対象化できないものだという点にある。さらにもう1つの理由として、もし「文化の創造」が可能であるとしても、その試みに対しては、「文化の保守性」が阻害要因になりうる、ということが挙げられる。これらの問題はどう解決すればいいのだろうか。

## 5.4　文化のデザイン

2008年の2月末に、「北海道大学観光創造フォーラム」が「ネオツーリズムの創造に向けて」というテーマのもとで開催された。席上、吉田順一

▶55　延藤安弘（2001）『「まち育て」を育む　対話と協働のデザイン』東京大学出版会　P.11

▶56　延藤（2005）『人と縁をはぐくむまち育て―まちづくりをアートする』萌文社　P.9

▶57　筑和（2008）「まちそだて北海道　―ロマンの富良野、ディバイズの十勝―」『大交流時代における観光創造』大学院メディア・コミュニケーション研究院研究叢書70北海道大学　PP.100-101

北海道大学観光学高等研究センター教授は、「観光創造の方法と方向――ネオツーリズムと文化デザイン」という表題の口頭発表で、「文化」を「デザイン」することを論じている。その内容は、「新しい観光を創造するためには『超日常』という『生活価値』の創造が必要であり、それは『文化』を『デザイン』することによって実現されるが、この場合の『デザイン』とは『意匠』であり『共有されるべき〈意味〉を創造する』ことである」というものである。この「共有されるべき〈意味〉」という件における「意味」は、端的に「価値」といい換えることができる。事実、発表内容を文章化した論文において、吉田氏は、文化を「人々に共有された価値『意識』」、また「人々が共有している『生活』価値とその価値が具体的な暮らしぶりとして表現されているライフスタイルとの総体である」と定義づけている[58]。「価値」と不即不離の関係にある「文化デザイン」が、ここでは提唱されているのである。

「価値の創造」が果たして可能か否かについての判断は、ここでは措いて、「人々が共有している生活価値」の認識方法について検討してみよう。ギアーツの文化の定義に沿って考えれば、文化を理解するためには、私たちは「象徴」を解読しなければならないだろう。「価値」や「文化」は、単なる観察では十分に見えないものとして存在するからである。そして（少なくともギアーツの、また筆者の見解では）、この、「文化の理解およびデザイン」としての「象徴の解読」については、一見迂遠な方法ではあるが、「概念の体系（象徴の体系）」を構築すること以外の方途は考えられないのである。

「まちそだて」も、「観光創造」と同様に「文化をデザインする営為」と見なすことができるが、それは「まちそだて」においても「象徴の解読」が必須の作業となっているからだ。「まちそだて」の第1条件として、当事者の「自己認識の獲得[59]」が挙げられるが、これは直感的なものを想定しているわけではなく、単なる観察では十分に見えないものとして存在する自分たちの「文化」を、象徴解読（＝概念化）を通して認識することを意味している。

「観光創造」においても、また「まちそだて」においても、「概念体系」の構築は、どうやら不可欠の前提をなしているようだが、ここには、実践論と学問論がその前提において重なり合っている、という興味深い事実が見て取れる。つまり、上で社会的実践の文脈で論じた「概念体系」の構築は、学問の領域でいえば「方法論」の構築を意味しているのである。この「方法論」とは、「聞き取り調査」などの具体的な方法ではなく、端的にいえば「研究の準拠枠」のことであり、ある学問領域の成立を保証する基礎概念群のことである。この構築がなされて初めて、当該分野における十全な学問展開が可能になるということができる。このように、今、「文化」に依拠した「観光」と「まちそだて」について、理論と実践の両面において、方法論構築が喫緊の課題となっているのであるが、これは両方の分野が上述の両面において、いまだ未成熟の状態にあることを示す事実であろう。その意味では、この領域・分野に従事する者にとって果たすべき課題は山

►58　吉田順一（2007）「観光創造の方法と方向―ネオツーリズムと文化デザイン―」『大交流時代における観光創造』　P.242。

►59　筑和（2008）P.101参照

積しているといえる。

# 6 観光と「まちそだて」

## 6.1 観光とは何か

他者との遭遇の際立った例として「戦争」と「観光」を挙げ、戦争が地域研究を促進させたことは前述した。それでは「観光」の方の効用は何だろうか。

いうまでもなく、観光は、訪れる人間と迎え入れる人間の相互性において成立する。通常、旅とは、人が日常世界から離脱し、ある異世界に接触あるいは参入し、そこで何らかの行為、経験をして、再度日常世界に帰還することをいうが、その中でも観光は、感興という要素が特に濃い旅といえる。すなわち、「快」感覚を伴った一時的な異世界体験というのが、観光の通常の捉え方であろう。

では、相互作用としての観光は、いかなる意義や効果を備えているのだろうか。以下ではこれについて考察するが、この箇所における考察は、観光を「理念的」に捉えたものであることを、観光が内在させている可能性を追求するものであることを、まず断っておきたい。

ツーリストが日常界から離脱するということは、一種の中間的な状態にあることを意味する。すなわち、日常生活の義務や規範から一時的に解放されていると同時に、新たに接触する異世界の束縛も受けていない状態にある。それは、軽やかで自由な状態、いわば浮遊状態であり、この「解放」された「自由」な状態が、潜在的に、新しい認識を可能にするのである。

よくいわれるように、観光は異世界・他者との出会いであり、異質なものの存在を知ることである。他者の存在を知ることから、他者を理解する可能性が生じてくるが、これはツーリストの視野の拡大に通じる。これが観光の第1の効果だとすれば、それに続くのが「〈自明性の罠〉からの解放[60]」である。これを、社会学者の見田宗介は次のように解説する。「自分自身を知ろうとするとき人間は鏡の前に立ちます。全体としておかしくないか、見ようとするときは、相当に離れたところに立ってみないと、全体は見ることができない。自分の生きている社会を見るときも同じです。いったんは離れた世界に立ってみる。外に出てみる。遠くに出てみる。そのことによって、ぼくたちは空気のように自明（『あたりまえ』）だと思っているさまざまなことが、〈あたりまえではないもの〉として、見えてくる[61]。」つまり、異世界という鏡が、自己を「自明性の罠」から解放して、自己の新しい姿を映し出す働きをするのである。このことから、観光にはツーリストの自己変容の契機が内包されているのではないかという推測が可能となる。

看過できないのは、上述の事柄と同様の現象がツーリストを受け入れる

►60 見田宗介（2006）『社会学入門』岩波新書 P.25

►61 同上

筑和正格 TSUKUWA Masanori

側（以下では「ホスト」と呼ぶ）にも起きうるということである。ホストは、地元の「自然」「歴史」「文化」を、換言すれば自らの「日常」を観光対象として提供する。その際、提供行為の効果を高めるためには、提供に先だって、自らの「日常」を精査することが必要であろう。つまり、ホストも自己の世界を確認・認識する必要があるのである。加えて、ホストの「日常」に対するツーリストの反応から、ホストが、自己の「日常」の、さらなる新たな認識を獲得する可能性もある。

観光は、こうした「異化効果」と呼ばれる現象を招来しうるものである[62]。「異化効果」とは、現実を日常とは全く異なった視点から観察することにより、見慣れたはずの現実がもつ別の姿を発見することをいう。「異化する」とは「よそよそしいものにする」ということである。それは、他者の目で自分たちの日常を見るということであるが、このことは、ツーリスト側にもホスト側にも理念的には起こりうるのである。

▶62　同上。ここでは比較社会学がもつ「異化効果」について言及されている。

両者の「新たな自己理解＝自己変容」が――その「自己理解」が「他者」との出会いを契機とするがゆえに――「他者」の存在の容認へと至るならば、そこには別の次元における観光の効用が見出される。上の思考実験で、観光が「学習効果」をもたらしうることが示されたが、観光を通じて「〈他者〉の存在の容認」の一般化が広範囲に展開することになれば、それは「平和状態の創出」に至る道を拓くのではなかろうか。

ただし、上で述べたように、ここでの考察はあくまでも理念的なものであり、現実は考察通りではないだろう。しかし、ここに構築した「観光像」と現実との懸隔を直視し、双方を正確に比較対照することができるならば、問題の所在が明らかになり、そこから改善方策立案のヒント発見へと道は拓けて行くのではないだろうか。

## 6.2　観光とまちそだて

「観光」という語が『易経』の「観国之光、利用賓于王」（国の光を観るは、もって王の賓たるによろし）から採られたことは広く知られている。「国の光」の「光」とは「広義の文化である」という解釈があるが、この解釈では、「文化」が「地域固有の自然環境による造形の妙としての風光[63]」も含むものとされている。この解釈が示すように、観光の対象は、いわゆる「自然」をも含めた総合的な人間の営為なのである。観光は、ある場所・空間における人間の過去や現在の営みとそれによる生成物や、人間によって保持された（自然）空間そのものに触れる行為である。したがって、観光を構成する要素を追求して行けば、「歴史・文化・自然」の3要素に到達する。ということは、経営論的観点から見れば、観光地としての質の向上を図るためには、この3要素を研磨しなければならないのである。

▶63　井口貢（2002）『観光文化の振興と地域社会』ミネルヴァ書房 P.5

一方、「まちそだて」の営為の具体的な現れとしては、おそらく「文化」に関連するものが圧倒的に多いだろう。筆者が取材した富良野の例を一通り見渡すならば、そこからは「食文化」「3R（Reduce、Reuse、Recycle）文化」「芸術文化」「交流（＝社交）文化」などに取り組む「まちそだて」志向の営みが視野に入ってくる。また、一般的に見て、過去の「文化」とし

ての「歴史」に重点を置いて「まちそだて」活動を行うケースも少なくない。加えて、都市景観のみならずいわゆる「自然」景観の保全（あるいは創造）の取り組みを通じて「まちそだて」の実現を目指すコミュニティも存在する。要するに、「まちそだて」においても、「歴史・文化・自然」が活動の構成要素をなしているのである。

このように、「まちそだて」を構成する3要素は、観光行動を促す3要素と重なり合うが、この事実は、「まちそだて」が観光振興の原動力であることを示している。「まちそだて」が実現すれば、その結果として旅行者が「まち」にやって来る、と即断定できるか否かの判断は措くとしても、少なくとも、魅力の乏しい「まち」は集客力が弱いとはいえるだろう。そこから、経営論の立場に立てば、一定の観光客数を獲得し、定着させるには、「観光客の増加を直接目的とする各種のイベント開催よりも地道に〈地域文化の向上〉を目的とする地域振興策を推進し」、「固有価値を有する地域全体の評価や価値を高める[64]」ことの方が効果的である、という考え方が生まれてくる。同様に、「どんな街にも観光の対象となる文化的資源は必ず存在する」として「常在観光」という概念を提唱する研究者もいる。「常在観光」とは、そのような「文化資源」を「掘り起こし、ブラッシュアップして地域内外に観光情報として発信していく」という「発想から生まれる観光の形態」であり、この発想は、地域振興と観光振興双方の「原点となる発想」であると解説される[65]。

上段で主張されているのは、いうまでもなく、「地域文化」がもつ「固有価値」の認識の重要性であり、「まち」が保持する「固有性」が価値をもつという思想である。つまり、「文化の保守性」の意義が、ここでは承認されているのである。

したがって、地域振興を経営論の立場で考察する場合にも、この文化論による分析と認識を大前提としなければ、振興に向けての現実的提言は実効性に乏しいものになってしまうであろう。新機軸を打ち出すためには、つまり変化を起こすためには、既存のものを保持しなければならないという、逆説的な取り組みが必要とされるかもしれないのである。私たちは、この点を肝に銘じなければならない。

## 6.3「文化の排他性」とリーダーシップ

しかしながら、私たちは、上述の議論が、無意識に「文化の保守性（＝地域の共通の価値）」を「良きもの」と前提していることに気づかなければならない。つまり、私たちはここで、前述した「文化の保守性」に由来するもう1つの側面である「地域の排他性（＝差別）」を想起しなければならない。「文化の保守性」は、「まち」独自の魅力を生み出す一方で、外部を拒絶する「狭量さ」も招来しうるのである。

確かに、日本国内、それも特に北海道においては、文化の保守性・閉鎖性・排他性がもたらす問題は、宗教や人種が衝突しあう欧米のケースが示すような深刻さはないかもしれない。また、特に「文化遺産」がその魅力の源であるような地域においては、上で述べたように、文化の保守性はき

►64　増田辰良（2000）『観光の文化経済学』芙蓉書房出版　P.74

►65　井口（2002）P.9

わめて重要な意義をもつであろう。しかし、それを認めた上で、私たちはなお、観光振興に通じる「まちそだて」の阻害要因となりうる「文化の排他性」をも念頭に置くべきではなかろうか。そもそも「まちそだて」は、これまでの議論が暗黙のうちに前提としているように、外部との接触・交流を歓迎するものである。そうであるならば、その「開放性」に逆行する「排他性」はやはり制御しなければならないだろう。「観光」の観点で捉えるならば、「排他性」は、たとえば、観光振興に対するマイナス要因である「ホスピタリティの希薄さ」として現象するのである。

それでは、「排他性」制御の課題はどう解決できるのか。

そこに必要なものこそ、「当事者」の「リーダーシップ」なのではないかと筆者は考える。上で、「〈まち〉に密着して経済行為を行う者」を「当事者」としたが、当事者の「リーダーシップ」を可能にする条件としては、さらに「〈まち〉の外部における生活経験を通じて〈経営〉感覚を養った者」、あるいは「〈まち〉への外来者から〈経営〉のノウハウを吸収できる者」が加わるだろう。

リーダーたちは、「概念体系の構築（前述の、自己認識）」に取り組み、その結果を精査しつつ「価値の表現」行為（＝「まちそだて」）を行わなければならない。「概念の体系」を構築しえたリーダーたちは、可視化された「概念体系」に従って「表現行為」ができるのである。他の人々にはその「体系」は見えない。しかし彼らは、「体系」は見えないものの、リーダーを信頼してついて行くことになる。リーダーにはその求心力がある。この、リーダーが内包する指導力・統率力をリーダーシップというのである。上で触れた「排他性」の制御は、したがって、リーダーたちによる「表現行為」において行われなければならない。彼らは、表現に際して、文化要素の取捨選択と組み合わせを行うが、この取捨選択には、当然、「文化の排他性」の制御も含まれるものと考えられる。

リーダーたちの「表現行為」が依拠する重要な要素として、シュンペーターの「新結合（neue Kombination）」理論が考えられる。筆者はすでに2度、この理論を紹介したことがあるが[66]、シュンペーターは、「新結合」を行うことが、経済発展の原動力であると指摘する。つまり、それまでになかった新しい「結合」を、人為的に作り出すことが「発展」につながる、というのである。リーダーたちは、この理論を踏まえて「新結合」という形の様々な「デザイン」を行うことが求められる。筆者は、富良野と十勝における事例と、シュンペーターが説く〈「新結合」遂行の5ケース〉というモデルとの適合性を検証し、この理論の有効性をすでに確認している。

本節の最後に、「まちそだて」のための「概念体系」のコンポーネント例を挙げてみよう。それらはまず、「スモールビジネス性」、「非営利中心性」、「ローカル性」、「非匿名性[67]」などであり、これらは、あらゆる「まちそだて」の共通項目と見なしうる概念である。各「まち」の特殊性については、やはり「歴史性」や「風土性」といった概念が基本的なものになるだろう。いうまでもなく、この「概念体系」を、今後さらに精緻化していかなければならない。

▶66　筑和（2007）「“まちづくり”から“まちそだて”へ～富良野の事例から学ぶ～」『観光創造の理論と実践』第四巻　北海道大学／筑和（2008）pp.102-103

▶67　「まちそだて」の営為に関与する個々人の独自性が可視的であること。つまり、没個性的な人々の集団ではなく、明確な個性をもつ個人たちの自律的な営為が、総合的に1つの特性をもつことを想定している。

## 6.4 アメニティ

上段で「まちそだて」が観光振興に通じることを論じたが、「まち」の住民の居住満足度を高め、同時にツーリストを引きつける要素を一言でいえば何なのだろうか。

「地元住民にとって楽しく快適でない街が、来訪者にとって楽しい街であるはずがない[68]」と、上で引用した研究者はいう。つまり、「自己の街の固有価値への矜持や、地域のエートスの高揚[69]」が「まち」における生活の質の向上に不可欠なのであるが、この望ましい状態を、筆者は「アメニティ」と名づけたい。

「アメニティ」という語は、日常的に「快適さ」や「居心地の良さ」といった内容で使用されるが、この用語に対するふさわしい定義は何か。

「快適さ」等の言い換えではない、より掘り下げた定義として、筆者は「アメニティ」を「住み甲斐」と規定することを提唱する。「快適さ」や「居心地の良さ」等を統括する概念が「住み甲斐」であると考えるわけである。この定義に関連して非常に興味深いのは、かつて近江八幡市の青年会議所で「死に甲斐のあるまち」という、「住み甲斐」とほとんど重なる語義の「まちづくりの合い言葉」が謳われたという事実である[70]。彼らの活動も、やはり「アメニティ」を希求するものと捉えることができる。様々な外見をとっていても、「まちそだて」の営為は通底する要素をもっているようである。

「まちづくり」の目標として、「誇りがもてるまち[71]」、「地元住民が誇りをもって語れるまち[72]」の創造がしばしが挙げられるが、「住むことの誇り」が「住み甲斐」すなわち「アメニティ」から生まれうることは容易に想像しうる。また、上述の「自己の街の固有価値への矜持や、地域のエートスの高揚」が、良好な生活環境の維持に立脚しているのはいうまでもない。安定した日常、習慣が阻害されない状況が保持されることが必要なのであるが、それはすなわち文化の保守性が担保されるということを意味している。当事者の「内面化された共通の価値観に立脚した営み」である「まちそだて」の一実現形態が「アメニティ」の創出であるということは、現実に行われている取り組みに貴重な示唆を与えるものではないかと思われる。

►68 井口（2002）P.15
►69 同上P.16
►70 同上P.14
►71 須田寛（2003）『実務から見た新・観光資源論』交通新聞社 P.292
►72 井口（2002）P.14

## 7 おわりに

最後に、本稿で提示した諸概念を振り返り、その内容をまとめてみよう。

①「文化」とは、ある集団が備える独特の生活様式である。この様式は、集団構成員の共通の価値意識を反映しており、保守性も備えている。また「文化」は、「意味ある象徴の体系」であり、単なる観察では十分に認識できないので、「概念体系」の構築という迂路を経由して把握するほかはない。

②「地域」とは、何らかの「枠」を備えた空間領域であり、ある「独自性」をもちうるが、その「独自性」は「地域文化」と呼ばれる。

③「国際」とは、「大きな地域」と「大きな地域」の相互関係をいう。これは「地域文化」相互の関係という側面ももっているが、その場合「価値意識」と「価値意識」の関係へと還元させることができる。

④「まち」とは、「小さな地域」、すなわち市町村内の共同体である。経済・社会状況の変化により、「まち」のアイデンティティの希薄化傾向が増大している。

⑤「まちそだて」とは、当事者の「自己認識（文化の概念化）」を前提とする「内面化された共通の価値に立脚した」持続する「まち」の活性化の営みであり、当事者のリーダーシップが牽引する「文化」の「表現行為」である。

⑥「観光」とは、異世界・他者と出会うという行為である。それは異質なものの存在を知る行為であり、自己変容の契機を提供する。「観光」の具体的な対象は「歴史・文化・自然」であるが、この3要素は「まちそだて」がその過程で取り組む対象であり、したがってこの3要素を媒介にして「観光」と「まちそだて」は共同性をもちうる。

⑦「アメニティ」とは、「住み甲斐」であり、「まちそだて」がその達成を目指すものであるが、同時に来訪者を魅了する要素でもある。

（2008年4月9日受理、2008年9月30日採択）